

Title	食習慣と胃腸がん：名古屋地方における胃がん，大腸がんの比較疫学的研究
Author(s)	田島，和雄
Citation	大阪大学，1986，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35396
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【42】

氏名・(本籍)	た	じま	かず	お
	田	島	和	雄
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	7413	号	
学位授与の日付	昭和61年8月5日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	食習慣と胃腸がん：名古屋地方における胃がん、大腸がんの比較疫学的研究			
論文審査委員	(主査)			
	教授	朝倉新太郎		
	(副査)			
	教授	後藤	稠	教授 北村 旦

論文内容の要旨

[目的]

わが国では近年、胃がんは著しく減少してきたが、結腸がんは年々増加傾向を示している。特に都会の男の結腸がんの増加は著しい。本研究の目的はこれら異なった傾向を示す2つの消化管がんに共通した危険要因、両者で異なった傾向を示す危険要因、更に防御的に働いている要因などを比較患者・対照研究により明らかにし、今後のがん予防に資する点にある。

[方法と対象]

調査対象は愛知県がんセンター病院の消化器科を受診した患者のうち胃がん、結腸がん、直腸がんと病理組織学的に診断された40～70歳までのがん患者200人と同病院に受診した非がん患者の対照群350人である。1人の医師による面接質問方式で約200項目調査し、35項目の食品摂取状況についてのみ自己

表1 年齢群別にみた比較患者・対照研究の対象者数(人)

年齢(歳)	胃がん群		結腸がん群		直腸がん群		対照群	
	男	女	男	女	男	女	男	女
40～55	29	17	11	5	10	10	57	33
56～70	30	17	16	10	15	16	54	42
合計	59	34	27	15	25	26	111	75
平均年齢	55.2	55.4	55.9	55.8	55.8	57.4	55.0	56.2

式のアンケート方式を採用した。調査期間は1981年3月から1984年3月までの3年間。今回の分析対象は表1の如く胃がん患者93人、結腸がん患者42人、直腸がん患者51人と性、年齢(±5歳以内)、調査期間(6ヶ月以内)をマッチさせた対象対照群186人である。

[結 果]

- 1) 食習慣の特徴として、胃がん患者群では米飯摂取回数が多く、塩辛い味を好み、結腸がん患者群では早くからパン・ミルクなど洋食の習慣を取り入れていた。
- 2) 35項目の単一食品群の摂取頻度では、塩干魚、白菜づけ、かぼちゃ、ピーマンが胃がんの、かぼちゃ、鶏肉、ハム・ソーセージが結腸がんの、白菜づけ、かぼちゃ、鶏肉などが直腸がんの危険度を高めていた。一方ミルクは直腸がんの危険度を有意に下げている。
- 3) 食事の仕方については直腸がん患者群で熱い食事を好み、よくかまずに呑み込むなどの傾向がみられたが、統計学的に有意ではなかった。
- 4) 嗜好品については喫煙が胃がんの危険度を高めており、逆に結腸がんの危険度を下げている。アルコールの中等量摂取は3部位のがんの危険度を下げている。
- 5) 排便習慣では、結腸がん患者群で排便時間が長く、便が軟らかく、排ガスが多いなどの傾向を示した。
- 6) 身体的特徴(身長、体重)、血液型などには3者とも患者、対照群で差がみられなかった。既往歴では胃がん患者群でかぜにかかりにくい者が多かった。
- 7) 高学歴、専門職の占める率は結腸がん患者群で高く、胃がん患者群で低く、健康意識、検診参加意欲については3者とも患者群で低かった。

[総 括]

以上、表2に食習慣、喫煙習慣、飲酒習慣などの主な結果をまとめてみた。それによると胃がん患者群と結腸がん患者群の食生活習慣は異った傾向を示し、直腸がん患者群はやや胃がんに近い傾向を示し

表2 発生部位別にみたがんの食習慣、喫煙習慣、飲酒習慣などの危険度に関する比較

	胃がん (RR)	結腸がん (RR)	直腸がん (RR)
米 飯 毎 回	+++ (1.8)	- (0.7)	(1.0)
濃い塩味を好む	+++ (2.6)	+ (1.6)	+ (1.8)
朝 パ ン 食	- (0.6)	+++ (2.0)	- (0.6)
油濃い味を好む	(0.9)	+ (1.9)	- (0.6)
熱いものを好む	(1.3)	+ (1.7)	+++ (3.5)
よくかまない習慣	+ (1.7)	+ (1.5)	+++ (2.2)
喫 煙 習 慣	++ (2.0)	- (0.6)	(1.1)
飲 酒 習 慣	- (0.7)	- (0.7)	- (0.6)

+++ : RR (相対危険度) > 1.5, P < 0.05
 ++ : RR > 2.0
 + : RR > 1.5
 - : RR < 0.7

た。今回の調査の問題点は対照群に消化器疾患（特に胃疾患）の患者が多かったことにあり、そのため胃がんの危険要因は希釈された可能性が強い。しかし本研究によりそれぞれのがん患者群の特徴がいくつか明らかにされた。今後胃がん、大腸がんのみならずそれらと同様の増減傾向を示す他部位のがんも含めて本研究をさらに発展させていきたい。

論文の審査結果の要旨

近年、本邦では胃がんが減少してきたものの大腸がんは逆に増加傾向を示している。この現象は戦後の日本人の食生活様式の欧米化傾向に関連して起こっていることが記述疫学的研究結果より示唆されている。

本研究は分析疫学的研究手法（患者・対照研究）を用いて胃がん、大腸がんの患者群と非がん患者群の食習慣を同時比較することにより、両がん患者群の食生活様式の特徴を明らかにしたもので、将来本邦で増減しつつあるがんの同時予防対策を検討していく上において、意義深い研究と考える。